



故 土 屋 忠 良 先 生

土屋先生を悼む

一 瀬 雷 信*

本学衛生学教授土屋忠良先生が昭和35年12月11日脳出血でなくなられた。学園全体わけでも食物学科の同僚と学生は先生に頼り期待するところが大きかつただけに、この全く突然の訃報に接して非常に驚くとともに深い悲しみにうたれたのである。ここに食物学会を代表して先生を慕い悲しむ心を表したいと思う。

先生は明治27年2月2日長野県須坂市に生れ長じて新潟医専医学科に入学し大正9年ここを卒業された。普通ならば臨床方面に入るところを「下医は病を医し上医は国を医す」と薄給を承知で医事行政の方面に進まれたのであるが、ここにも先生の気骨の一端をうかがうことができる。

行政官としての最終コースは京都府衛生部長であつてここで図らずも本学と先生との関係が結ばれたのであつた。先生の話によると昭和26年に当時の増山学長と朝倉学監から京女大食物学科を栄養士養成施設校に指定方の依頼を受けた。当時厚生省は栄養士養成に国家試験を重点に置き私大の指定は考えていなかったたのであるが、先生が直接厚生大臣にも会い百方情理を尽された結果、同年九月本学食物学科は全国に率先して指定の通牒に接したのであつた。

こうして本学の栄養士養成課程が発足したが課目担任者には医師たる資格を有する専任の教

授たるべしというきびしい条件がついているために、適任者を求めることが甚だ困難であつた。この状況を先生持ちまへの俠気で傍観できず、当時先生の部下であつた中村（正）先生と平田先生を本学教授に推薦し、先生自身もまた翌昭和27年5月本学に教授として迎えられたのであつた。

爾来学生の指導に課程の整備に熱心に力を尽され、またわれわれの業務上にも先生の経験からくる数々の貴重な意見を提示され大いにわれわれを啓発された。先生は巨軀童顔、よく語り、よく呑み、よく食い、陽気なことが好きな質であつて、われわれ同僚の集りではいつでも中心的な存在になつておられた。なくなられてみるとわれわれの心のどこかにぼつかり大きな穴があいた気持で、今更に先生の偉大さを感じる次第である。

食物学科教室では現在新築計画が練られ、大きな発展の気運に際会している。これについては先生自身も大いに関心を寄せられ、われわれもまた先生のお力に期待するところが大きであつたので、先生のなくなられたことは非常に残念に思う。しかしわれわれはこれに挫けず先生の御意見や教訓を胸に納めて計画に邁進するつもりである。そしてこれがまた先生の霊をお慰めする所以であるかとも思う。

昭和36年6月17日

* 本学教授